

―探求・川にちなんだ万葉集の歌―

万葉の川心 第21回

川崎市立木月小学校教諭 船田 園子

小治田の年魚道の水を

間無くそ 人は汲むとふ 時しくそ 人は飲むとふ

汲む人の間無きが如 飲む人の時じきが如

吾妹子にわが戀ふらくは 止む時もなし

(巻第十三 三二六〇番歌)

小治田の、年魚へ行く道の水を、絶えることなく人は汲むという。時間も定めず人は飲むという。汲む人の絶え間がないように、飲む人の時を定めないと同じく、妹に対する私の想いは止む時をしらない。

一杯の水を飲む。それが、この上ないぜいたくになるときがある。例えば、思いっきり走り走った後の一杯の水。それまで放出してカラカラになったところに一気に流し込めば、細胞の一つひとつにしみわたり、「生き返った。」と声をあげて、元気が戻ってくる。あるいは、秘水ともいわれるべき、山奥の清水と出合ったとき。山ふところの深くを通り抜け、清められ、必要なものを全てを持ちながら、余分なものは削ぎ落とされた名水を求めて、遠くから人が来るというのは、決して珍しい話ではない。水を飲むという健康法もあるそうだ。浄水器は都会では必需品となってきた。昔は「湯水のように使う」という言葉があったが、もはや一杯の水は貴重である。でも、もっと豊かに感謝したい一杯の水は、愛する君がくれた水だろう。

以前紹介したが、こんな歌がある。「泊瀬川 早み早瀬をむすびあげて 飽かずや妹と問ひし君はも」(巻十一 二七〇六番歌) 泊瀬川の急流に入り、手に水をむすんで、もつとほしいか、うまいかと、私にやさしくたずねた君は、ああ(もういない)。女の自分には入れそうもない急流に入り、手に汲んでくれた水は、どう表現したらいいのだろう。至福の水とも言えそうな、命ごと心ごと潤してくれる水である。病床のおり、妻の飲ませてくれる水と同じと思う。水にまつわる想いは尽きることがない。至福の水を与えられる人になりたい。その一杯が一生を豊かにするような水を、大切に思いたい。

冒頭の歌の小治田は、奈良県高市郡飛鳥地方という説と、尾張の愛智郡という説がある。年魚という地名があり、そこを貫く道に清らかでおいしい水として有名な水があったと思われる。絶え間なくあふれる恋心を、水を求めてやってくる絶え間ない人の様子と重ね合わせている。水を汲み水を飲み、のどをうるおす。喜びがあふれ、人が集まる。そんな情景が浮かんでくる。この歌の形式は、巻一の二十五番、二十六番歌、天武天皇が皇太子を辞しての失意の吉野入りのことを詠んだ歌と同様で、他にも巻十三の三二九三番歌がある。民謡としてこの地のことが多くの人に歌われ、伝わったことだろう。

歌碑は、愛知県名古屋市長穂区の瑞穂運動公園わきの松林のそばにあり、近くを山崎川が流れている。清らかな流れだけでなく、飛び石の橋、岩の滝、散歩道などが作られ、美しい景観にカメラを持った家族連れが穏やかな日曜の午後を楽しんでいた。

豊かさは、心の中にどれだけ「至福の水」の思い出を持てるかにあるかもしれない。ふと、そう思った。

